

Freude

vol. 19-18 2026.3.11 .wed



3/18(水) 18:30 北巴民センター
地盤は 3/4号 = 2-2!!
25(水) 18:30 聖指の教会
4/1(水) 18:30 聖指の教会

女声が Benedictus に入りましたが、なんと「**Benedictus が速い!**」。ネットでは「他のミサに比べて Kyrie と Benedictus の速度が逆」な〜んで書いてあったりして、やっぱりすごく特徴的なことらしいです。これを論評してるエッセーがいろいろある中で、「この人、ハイドン好きなんやなあ」というのを見つけました。モチロン、この人の感想なので、違う考えもあると思いますが、なんか、面白いので紹介!以下「風街ろまん「クラシック音楽の小窓 その後」より

エステルハージ侯爵夫人命名日を記念するミサの作曲にも、彼は無限の創造力を発揮し、1796年から1802年の間に、まさにシンフォニックな広さと活力を備えた6つの傑作を作り上げた。『ハルモニー・ミサ』は彼の最後の大作で、1802年9月8日にアイゼンシュタット宮殿の敷地内にある教会「ベルク教会 (Bergkirche)」でハイドン自身の指揮で初演された記録が残っている。

ハイドンの後期ミサ曲の多くがそうであるように、タイトルは彼の死後しばらくして生まれた名前である。「ハルモニー (Harmonie)」とはドイツ語で吹奏楽団のことで、このミサのオーケストラは、当時としては珍しく、フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルン、トランペット (+ティンパニ) という古典的な管楽器をフル装備し、さらに弦楽器、オルガン、声楽ソリスト、合唱が加わる。この「吹奏楽付きミサ」には、特別な豊かさと深みがあり、管楽器のソロは頻繁には登場しないが、登場するところでは極めて効果的に使われている。

ハイドンは、作曲家初期の50年前からミサ曲を書き続けており、形式的な慣習の多くに従うことに満足していた。たとえば「グロリア」は3つのセクションからなるが、ソプラノ独唱による速い始まり、続く「Gratias」は、ゆっくりとした内省的な展開、最後「Quoniam, tu solus sanctus」は、再び速く、力強いフーガで締めくくられるという、試され検証されてきた構成になっている。「クレド」も同様だが、さらに目的をもっており、中央部「Et incarnatus est」では磔刑の陰鬱さ、その後の復活の派手な祝賀「Et resurrexit」とが対照を成す。これらは慣習による構成だが、ハイドンの天才的な自信によって、溢れ出る力強さ、活力、勢いを感じさせる。

さらに、彼はいくつかの驚きを密かに用意している。「Kyrie eleison」は、従来は高貴で敬虔な曲調だったが、ここでは自己完結型の楽章となっており、「Christe eleison」の言葉を対照的な中央の段落に割り当ててではなく、それ自体を取り出して表現している。「サンクトゥス」は、謳われるたびに音量と和声的関心が強まり、その後に喜びが湧き上がってくる。そして、「ベネディクトゥス」は、伝統的には優しく抒情的で、ソリストのための曲として書かれるが、ハイドンはそうする代わりに、素早く動く合唱を主体とした楽章として構成し、興奮した期待を示唆している。そのすぐ後、予想外の調性の変化 (ト長調) により、「アニュス・デイ」の序盤部分に特別な輝きを与え、最後の「Dona nobis pacem」では主調である変口調で終了する。

ハイドンは、この『ハルモニー・ミサ』を「骨の折れるほど苦勞して作った」と言い、これが彼の最後の大作となった。ハイドンの作曲活動はほぼこの1802年で終わる。それは持病が悪化し、もう作曲ができないほど深刻なものになっていたからだが、これは新しいアイデアが次から次へと湧いてくるハイドンにとって、耐え難いものであったことは間違いない。

